

読書会の妙味

青 山 巖 豪

知の支え合い

われわれのさざ波読書会は、昭和46年12月28日、当時指宿市にあった「さざ波荘」で発足した。そのころ指宿市立丹波小学校に勤務していた福岡卓志教諭が、県教育センターの長期研修で、時の県教育センターの濱里忠宜研究主事のゼミに参加し、それに触発され、「人生をより豊かに歩むためには、携わる職業に関する専門性だけでなく、人間としての見識を広く深く身に付けていかなければならない」との志に燃えて立ち上げたものである。

指宿市を中心とする教育関係者でスタートした読書会だったが、今では県立図書館を会場に、県下一円から職種を問わず参加してもらえる読書会になっている。

もともと書物は、一人で心静かに読み味わうものであると思う。しかしわれわれが敢えて読書会にこだわってきたのは、それぞれが受けた知的触発や味わった感動を持ち寄って、それをさらに広め合い深め合っていく場とするためである。

書物と対面するときわれわれは、持ち合わせの知見のすべてを傾注して著書の内容を読み解いていく。そうやって読み解いた著書の内容に関することはもとより、関連する本の紹介や体験談等、さまざまなオリジナルな発想もいっぱい披瀝し合うことになる。そのことが読書会をいっそう楽しくし、稔りあるものにしていく。

平成23年2月の例会で、さざ波読書会も344回目を迎えた。取り扱った著書も340冊を超えた。「思えば、よくここまで来れたものだ」との感もあるが、これも、顧問として支え続けてもらっている鹿児島純心女子短期大学の濱里忠宜教授のおかげと感謝している。

以下、われわれの読書会での学び合いの成果の一端を、私なりの視点でまとめて、「読書会の稔り」として紹介する。紙面の都合で、ほんの一部分しか紹介できないが、テキストから見えてくる課題をもとにして、さまざまな角度から考えを述べ合うことによって課題が逐一整理・統合されていく様子をお伝え出来ればと思う。気のおけない仲間同士で、精一杯の磨き合いができる空間がとても有り難い。いわば「知」の支え合いである。

知の稔り

1 読書会の良さ

この長い間の支え合いを通じて、読書会とは、次のような果実をもたらす「知の稔り」の営為だとわれわれは考えている。

- (1) みんなが、同じ土俵で培った知的経験を共有しているので、過去のテキストの内容等とも関連づけながら、無駄なく充実した研修が進められる。
- (2) 読書会でのフリートーキングを念頭に入れながらテキストを読む（事前の一人読み）ので、テキストへの書き込みや疑問点の精査等に真剣味がこもる。
- (3) 理解しにくいところを、臆することなく共通の話題にして深め合っている。
- (4) 研修後の懇親会で研修内容に^{なめ}鬆しがかかり、同時に人間関係もいよいよ深まっていく。

2 読書会の実際（第310回読書会から）

読書会の実際を紹介してみよう。

(1) テキスト

「思考の整理学」 外山滋比古著 ちくま文庫

情報の“メタ”化（抜粋）

- (1) 思考の整理というのは、低次の思考を抽象のハシゴを登ってメタ化していくことにほかならない。第一次思考をその次元にとどめておいたのでは、いつまで経っても単なる思いつきでしかないことになる。整理・抽象化を高めることによって高度の思考となる。普遍性も大きくなる。(P.77)
- (2) 誤解の多いコミュニケーションで、説明をわかりやすくするためには、抽象のハシゴをおりて二次的・三次的情報を一次的情報に還元するのが有効である。しかし、これが文化の方向とは逆行するのも事実である。人知の発達、情報のメタ化と並行してきた。抽象のハシゴを登ることを怖れては社会の発達は有り得ない。(P.77)
- (3) 抽象のハシゴを登っていくのは哲学化である。われわれの民族は、古くから多くの歴史的記録を残している。ところが、これを歴史論、歴史学に統合するのに欠かすことのできない史観がはっきりしていなかったらみがある。第一次的歴史情報には恵まれていても、これをメタ化して、二次・三次の理論にする試みはあまりなかった。(P.78)
- (4) 思考と着想についても同じことが言われそうである。ちょっとした着想、具体的な知識にはこと欠かないのに、それを整理、統合、抽象化し、体系にまで高めるのはまれである。思考の整理には、平面的で量的なまとめではなく、立体的、質的な統合を考えなくてはならない。(P.78)

(2) 課題の設定

- ①情報のメタ化とはどういうことか。
- ②情報の整理・統合・体系化の効用とはどういうことか。

(3) フリートークング

①情報のメタ化について

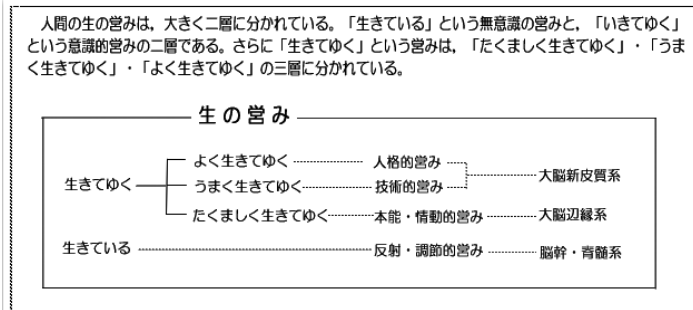
メタ (meta) とは、もともとギリシャ語で「後に」とか「越える」という意味の接頭語だという。このことから、情報（思考）のメタ化とは、ある情報や思考（第一次情報）を越えて、その背後にあるより本質的な情報や思考（第二次情報）に到ることと考えられる。木の枝葉の部分を第一次情報とすれば、それらの背後にある太めの枝は第二次情報であり、さらにそれらを支えている幹の部分は第三次情報ということになる。枝葉の部分を越えて太めの枝から枝葉のことを考えること、あるいは木の幹の部分から木全体のことを考えていくことが、情報（思考）のメタ化ということになる。

②情報の整理・統合・体系化の効用について

人間が生きてゆくということは、意識下の身体調節機能等の支えを得て、食すること・働くこと・思うこと等、さまざまな意図的行動を展開していくことである。

脳生理学者の時実利彦は、その著「人間であること」（さざ波読書会第1回テキスト）で、人間の生の営みを下図のように図示している。この図は、人間の食することや思うこと等（生の営み）の第一次情報を抽象化（メタ化）して、第二次情報に整えたもの

と考えることができる。



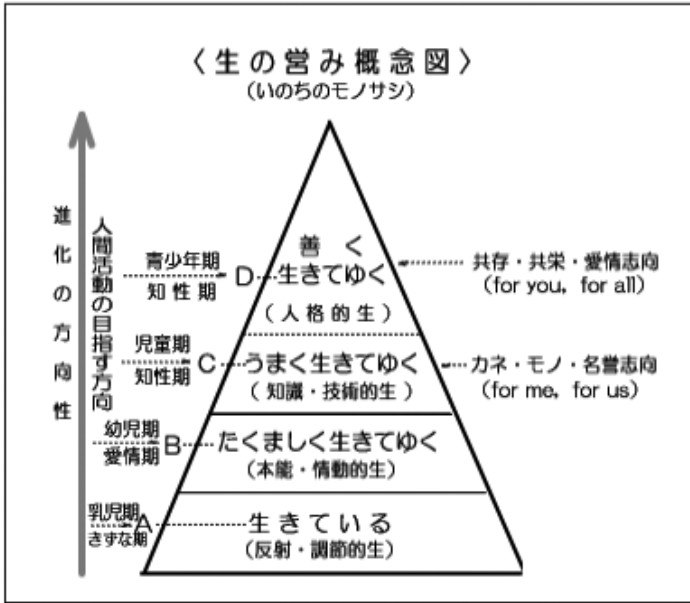
しかし、これはまだ人間が目指して進むべき指針（大自然の意図する進化の方向）がはっきりと示されていない。この情報をもっと立体的に構造化して、人間が目指して生きてゆくべき方向性がわかるように示す必要がある。

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、「あらゆる人間活動は何らかの『善』を希求する。だが、諸々の『善』の間には従属関係がある」と言っている。次の「生の営み概念図」は、このアリストテレスの言葉を手がかりに上記「生の営み」を構造化したものである。

A・B・C・D四段階の生の営みは、進化の方向性を示し、しながらに生の営みの価値的体系を表している。アリストテレスの言葉を借りると、A・B・C・Dの生の営みの間には従属関係があり、レベルA・B・Cの生の営みは、レベルDの「善く生きてゆく」という最高善に到達するための従属的生の営みであるといえることができる。平たく表現すれば、カネ・モノ・名誉志向の“for me, for us”の価値観は、共存・共栄・愛情志向の“for you, for all”の価値観に従属するということになる。

時実利彦が示す「生の営み」という二次的情報を、大自然の意図する進化の方向性を軸にして第三次情報に整理・統合（メタ化）していくと、そこに「いのちのモノサシ」とも言うべき新たな価値基準が浮かび上がってくる。

政治や教育においても、日常のさまざまな問題の解決に当たっても、われわれはもっと情報の整理・統合（メタ化）につとめ、



物事を本質的な視点で処理していけるように心がけていかなければならないとの共通理解ができた。

そのような意味で、われわれの読書会は、「生涯読書による生涯育ち盛り」の「知の稔り」の営みであると言えよう。

知の晩餐会

さざ波読書会は、われわれにとって、「知的晩餐会」であると考えている。人間は、大自然の意図としての目に見えないレールに載って、自己創造的に果てしなく進化する（育つ）存在である。志を同じくする仲間が相集って磨き合うことは、いわば「集団での自己創造の宴」と言えよう。「人間は、パンのみに生きるのではない」という言葉があるが、「生きてゆく」ということは、右手にパンを、左手に本を携えて、生涯にわたって育ち続けてゆくことだと言ってよいかもしれない。

(さざ波読書会会員)